



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

CITATION:

雑報. 天界 1921, 1(13): 266-267

ISSUE DATE:

1921-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159636>

RIGHT:

雜報

●中村要氏の新発見

京都大學天文

臺の中村要氏は去る十一月三日午後八時頃、四吋赤道儀で變光星 W Persei を觀測中、ふと、其の附近に見馴れない光輝の星があるのを發見した。其の後、數回此の星を觀測した結果、意外に早く光度が變化する模様である。又、同氏はリツク天文臺から出版してゐる天球の寫眞や京都大學で此の星を撮つた寫眞などと比べて、どうやら新變光星だとわかつた。今日迄の觀測結果で見ると、よほど變光が速いものらしい。

●ジャバ天文臺の計畫

近頃、南洋

のオランダ領ジャバ島バンドン市 (バタビアの東南七十哩) に天文學會が組織された。目的は、ゆく／＼將來に、同島のレンバングで天體物理研究のための大きな天文臺を設立するのである由。會はオランダの東印度會社の副會長スワート (Swart) 氏が名譽總裁となり、ボシヤ (Boscha) 氏が會長になつて、同氏が焦點三十呎の望遠鏡を寄附するのだといふ。

●ウインネケ彗星の軌道要素

今

年度の第二彗星である此のウインネケ彗星について、此の程米國カリフォルニア大學の R. T. クローフオード氏とエルケス天文臺のバアナド教授とが、別々に計算の結果を發表した。

前者は今年四月十二日と同二十九日と六月七日との三回の觀測を材料とし、後者は又、同四月十二日と、五月七日と同三十一日の觀測を材料としたものである。

軌道要素

(クローフオード氏)

(バーナード氏)

近日點通過	一九二二年六月二二・九三〇四六日	同六月二二・九一六四九日
近日點進度	一七〇度一九分五六秒	一七〇度一七分一八秒
昇交點黃經	九八 一 五一	九八 六 二九
軌道面傾斜	一八 四九 四三	一八 五四 三七
長軸軌道の半	三・二三二二(天文單位)	三・二九六三
離心率	〇・六七八〇四七	〇・六八四二四五
近日點距離	一・〇四〇六(天文單位)	一・〇四〇八
平均角速度	六二・〇六二八秒	五九二・八八八

因に、彗星などは、太陽の引力ばかりでなく、他の遊星の引力を絶えず受けてゐるので

ではない。

攝動作用の結果、軌道要素は、僅かづつではあるが、絶えず變化しつゝある。此のクロー

●對日照が見える

京都大學天文臺

フオード氏の要素と、バアナド氏の要素と比べて見ると、同じ星の要素でありながら、少しづつの違ひがあり、又、本誌十月號第二二二頁に載せたメルトン氏の要素とも違ひがあるのは、皆、材料に用ひた觀測と其の日附が違つてゐるからであつて、決して計算の誤差

の觀測者中村要君が、去る十一月五日の午後の休養時間、傍の友人達を顧みて『ゲーゲン・シャイン (獨逸語 Gegenchein 英語では Counter-Glow 邦語に譯して對日照) が見えるよ』と言ひ出した。皆は大びつくり。何しろ、山本助教を始め、對日照とは書物で讀んだことがあるだけで、誰でも今までに見たことが無

いゝ非常に薄い光りなので、普通の眼では、見るのに困難である」と、この本にでも書いてあるのだから、山本氏など、今までに、すいぶん忍耐して天を捜して見たけれど、遂に見當らず、全く見えないものと諦めてゐた。こんな難物が「見えるよ」と言はれて皆が驚いたのも無理はない。

對日照とは、丁度、太陽の位置と正反對のところに大きく横がつて見えるボンヤリした光りで、有名になつたのは十九世紀の半頃から、プロルセン、バクハウス、バアナアド氏等が発見して、やかましく騒ぎ出して以來のことである。黃道光の延長したものだらうといふ説が一般に信じられてゐるが、大低いつでも見える筈のもので、太陽と反對だらう、太陽が西に没すれば、東から上つて来る。又眞夜中十二時の時に子午線を通過するのだから、月や街路の明りが無ければ、誠に見易い位置にあるのだが、何分にも評判の通り、光りが薄いので、側に一等星や二等星が澤山在つては、其れ等に妨げられて見えにくい。

中村君に誘はれて、同夜十時頃、天文臺に出て見ると「それ、あすこに」を教へられて「ナルホド、さう言へばさうだ。いかにも、

ボンヤリした大きな光りが在るやうな氣がする」。「ふちの界が目など、ハツキリしてますよ」。「ウム、僕にはハツキリしてゐるほどには見えないが、兎に角見える。最も光りの強い所は牡羊座の星からゐあたりで、東西に十度もあるが、南北には三度ぐらゐ……」山本氏は對日照を見たのは、之れが生れて始めてであつた。

この對日照は、黃道光と同じく、今では天體であるか、地球の上層の物質であるのか、學者間にもいろ／＼説はあるが、エバーシエツド氏などは多分、彗星のやうに地球が持つてゐる尾だらうと言つてゐるし、シカゴのモールトン氏等は流星物質の集團で、かのラグランジの直線解法に相當する天體の一群だらうと言つてゐる。

太陽と正反對の位置なので、太陽が動けば對日照も動く、それに、何の理由だが、一年中の見えかたも時々變動するので、始終見るのは困難であるが、歐米あたりでも、多くは九月十月頃に見てゐる。其の頃は双魚座から牡羊座あたりで、大きな光の星が無いのが好都合なのである。双眼鏡では駄目、是非、肉眼で見なければならぬ。光りが薄くて面積が

廣いことから。そして月夜はいけなしいし、空が特に好く澄んでゐる時が一番好い。讀者諸君の實見をすゝめる。

●外國の天文學者の近況一束

カプティン氏 オランダ國グロニンゲン天文研究所長として、長く星辰學界に活躍し二大星流説を主唱した同氏は、今般、定年に達して退職した。目下は同國ライデン天文臺の臺長補助をしてゐる。

ハーゲン師 今般、大著「變光星」を出したのに對し、同氏を生んだ獨逸ボン大學は名譽理學博士の學位を贈つた。

グトニク氏 さきに逝きしヘルマン・ストルーフェ氏の後をつぎ、獨逸ベルリン（パベルスベルグ）天文臺長になつた。

ルーデンドルフ氏 さきに退隱したミユレル氏の後をつぎ、獨逸ポツダム天體物理臺長に任命された。

●冬至頃の夜の空（古川）

本月廿二日は冬至であるから其の反對の夏至の點の近傍の天球面は夜もすがら輝いて其處にはオリオン、牡牛、駭者、小犬、大犬の諸星座の一等星が燦爛と光つて、誠に寒空を辛抱して外に佇んだ甲斐のある時期である。